

僕はそれでも
生き抜いた

春山
満

Haruyama Mitsuru

本文デザイン
アイ・シー・イー
石江延勝

僕はそれでも生き抜いた

春山
満

はじめに

苦勞は買つてでもしろ、人は言う。

よくそんな無責任なことが言えるな。

よくそんな恐ろしいことが。

人生の絶望と辛酸を嫌というほど舐めたものは、こんな言葉を吐かない。

もう一度二十代に戻れたら、人は懐かしむ。

よくそんな思いになれるな。

抗えない宿命を身に纏い、毎日この身をカンナで削ぎ落とされるように肉体が衰

えるなか、不安と絶望に苛まされ、それでもかすかな希望へ駆け上がろうとした、あんな恐ろしい時代に。

青春とは唾棄すべきもの、森繁久彌は語る。

そのとおりだ。

振り返る若き日がきらきら輝く思い出出で溢れる人もいる。

僕にはそんな記憶はない。

はらはらと、ひりひりと、今でも傷口が生々しく痛むような。

いつも何か探し物をしながら、逃げるように駆け抜けるように過ぎ去った日々。

だからこそ、愛おしい、秘密の小箱。

この本に書かれているのは、僕の半生の断片。
ビジネス書でも、啓蒙書でも、啓発本でもない。
一人の乱暴な男が駆け抜けた足跡だ。
非常識な教えだ。

アメリカのビジネスウィーク誌が「アジアの星25人」に僕を選んだ。
胡錦濤やシンガポールの首相と並べて「アジアの代表的指導者25人」に僕を選ぶ。
「難病と家業の倒産という絶望の淵に立ちながら、いろんなものを失くす端から
いろんなものを見つけてきた。決してないものねだりをしないで、今ある可能性
と次なる希望だけを見つめて、這い上がってきた。世界が混沌とし、アジアがそ
の坩堝くわぼと化すなかで、彼の生き様に未来を拓ひらくく光がある」と選考理由を記す。

僕は、生きるために、働いてきた。

なりふり構わず死に物狂いで、働いてきた。

僕は、生きるために、学んできた。

どんなときもどんな場所でも、必死で学んできた。

僕は、生きるなかで、知恵と力を身につけた。

どんな環境でもどんな時代でも、生き抜こう。

明るく元気に、賢く逞たくましく、何としてでも生き抜こう。

この本には、そのヒントがある。

僕はそれでも生き抜いた……………目次

はじめに…………… 4

第1章 26歳の死刑宣告

- 失くしたものを数えるな 12
- 宿命に抗わず「運命」を掴む 17
- 「コップ3分の1」でも希望はある 21
- 心は泣いてもニコニコ顔 25
- 壺の中からも満天の世界に通じる 30
- 死にたかつたら「思い出せ」 35

- 闇の中に活路がある 47
- 反面教師は「恩師」でもある 51
- 悪人とつきあえ！ 55
- いい縁だけが縁ではない 59

第3章 僕の戦友

- いい男にはいい女がつく 64
- 絶望こそ、希望 68
- 自分にしかできないことを探す 73
- 子には財産より「人生」を残そう 79
- 素直な疑問の中に宝の山が…………… 83
- 常識の中の非常識を見つける 88
- 立ち木を見る 42

第2章 借金まみれの起業

第4章 成功する人・しない人

- 物事をまっすぐ素直に見る 94
- 海中に沈む90%をリサーチ 100
- 「ニーズ」の裏に「ウォンツ」がある 104
- 会社が小さくても大企業の頭脳になれ 109
- 縁は偶然でなく必然 115
- 快適度・価格の「3革命」 122
- 内なる敵を攻めたければ、外と交われ 128
- 「ともに暮らし合う調和」が未来を拓く 136

- 死にたい奴は死んでいい 162
- 「喜神」と「胆識」 168
- 壮して学べば、老いて衰えず 173

第6章 僕がやりのこしたごと

- 志を持った「燈火」で片隅を照らす 180
- 脳には「使われていない引き出し」がある 185
- 大企業の尻尾より零細企業の頭になろう 192
- 「死なせない医療」が日本を食い潰す 198
- 「未来の子孫」のために礎となる 206
- 最期まで輝いた「第三の人生」を創る 212

第5章 迷路に入ったら古典を読み

- 歴史を越えた知恵を羅針盤に！ 144
- 「部下を掌握する戦術」 150
- 論語は生きた学問だ 155

著者略歴…………… 222

第1章

26歳の死刑宣告

失くしたものを 数えるな

スキーをやっている最中、手足が冷えだして、ストックがちよつと握りにくいな、と感じていた。思い返せば、これが始まりだった。24歳の冬だった。

それまで、僕はやんちゃでスポーツも大好き。普通の人たちよりも頑強な肉体をして、元気すぎるほどの人間だった。近い将来、自分の体がまったく動かなくなるなんて、想像もしていなかった。手足が冷えるぐらいのこと、深刻には考えなかった。しかし、その後、気がつくと、走り方もおかしくなり、脱力感も出てきた。握力もどんどん落ちてきた。25歳、26歳と坂道を転げ落ちるように、体がおかしくなっていく。さすがに観念して、筋肉疾患の専門といわれる国立病院を

訪ね、1週間ほどの検査を受けた。

診断結果の日、病院に行くときたくさんのお医者様たちが待ち構えていた。そして、難病の宣告を受けた。

進行性筋ジストロフィー。

聞いたこともない病名だった。徐々に筋肉の萎縮が進行し、やせ衰えて力がなくなる病気だという。僕の場合、体内のクリアリン酸という新陳代謝に必要な酵素がなぜか異常増殖し、運動細胞膜を破壊しているようだ。

「進行性筋ジストロフィーにはいろいろなタイプがありますが、春山さんのは手先、足先から体の中心に向かって運動細胞だけを全部、崩壊させていきます。難病中の難病と呼ばれ、この細胞破壊は現代医学では止められません。残念ながら、原因究明もまだできていません。したがって、クスリも治療法もありません。対症療法もありません」

医師はこう言った。僕は黙って聞くしかない。

「また、この病気にはリハビリはありません。運動すればするほど、細胞の破壊は早くなります。寝て休めば、体力の減退でもっと機能低下して破壊を早めます」
運動してもダメ、寝て休んでもダメ。「それでは、どうすればいいんですか？」
こう尋ねる僕に、医者が唯一与えた処方箋は、「今日できたことを、できるだけ明日続けてください」と、禅問答のようだった。それだけにとどまらない。さらに、追い打ちをかけた。

「春山さん、間もなく車椅子になることを覚悟してください。その車椅子も、長くは漕げないでしょう。やがて手も動かなくなつて、寝返りもできなくなるかもしれない。あなたの意志とは無関係に、どんどん機能は奪われていきます」

この言葉、まるで死刑宣告のように聞こえた。バットで殴られたような思いだった。しばらくボートとしていた僕に、医師たちは続けた。

「春山さん、3カ月から6カ月の入院だと思ってください」

「はい」と力なく答えてしまった僕に、医師たちはいろんな話をしてくれた。僕

の頭にはほとんど入らない。ふと、「治療法はない」と宣言したのに、なぜ入院しなければならぬのか？ そんな疑問が湧いた。

恐る恐る、「あのく、どういった目的で入院するんですか？」と尋ねてみた。あのとときの医師の表情は、今でも忘れない。

「いやあ、春山さん、あなたの筋ジストロフィーは手先、足先から全身くまなく、きれいに運動細胞だけを潰していくんです。こういうタイプ、日本では非常に珍しいんです。だから、克明な検査をさせてもらいたいです」

何の照れもなく、目をキラキラ輝かせながら、こう言った。彼らにとって、僕の体を治すなんてどうでもいいことなのだ。春山満という人格もどうでもいい。珍しい症例に出くわして、まるで子供が新しい虫を見つけて標本にするような医師たちの目を見て、ムカッと怒りが湧いてきた。そして、思わず叫んでいた。

「お断りや！ お前ら医者にとっては、おもしろいサンプルの一つかもしれないけど、俺にとっては、一生一回の人生というレースや。こんなところで、お前ら医者の